NPO法人
日本ららばい協会

Incorporated nonprofit organization Japan Lullaby Association

ららばい通信

Lullaby News

2020年
特別号

特定非営利活動法人（NPO法人）
日本子守唄協会は
『日本ららばい協会』と名称を
変更して活動を再開いたします

イラスト／瀬上マキ

［目　次］

■ 日本ららばい協会の事業内容
■ 会長、理事長、理事のごあいさつ …1
■ INFORMARION／皆様の悩み相談受け付けます …4
■ 相談業務の充実を目指して …5
■ 母を考える　西舘 好子 …7
■ 特別寄稿／母という「魔法」　せがみ みほ …8
■ 連載 世界子守唄紀行 第26回
「アフガニスタンの子守唄」　鵜野 祐介 …11
■ INTERVIEW／放浪という現実　木下 晋 …12
■ 連載 直島便り 第11回
「病い癒えて、健康・平和と言う幸せ」　山根 光惠 …14
■ 日本ららばい協会 企画開催へのお願い …16
■ COLUMN／風邪雑感 …17
■ 寄付者名簿

2020 年 10 月発行

日本子守唄協会は『日本ららばい協会』と名称を変更して活動を再開いたします

月の美しい九月、いつもなら、つるべ落としの秋の夕暮れに真っ赤な夕陽、もっとも日本の哀歓をそそる風景を観る季節のはずです。異常な暑さの夏が過ぎ、今年の夏は思い出を作るには、あまりに痛ましく、あまりにも風情のない夏となってしまいました。

想像さえしていませんでしたが、コロナ感染に振り回される日々はこれからも続きそうな気配です。

日本子守唄協会(旧)は、2月の山口県周防大島でのイベントを最後に今期に予定されておりましたすべての計画が中止、延期となり、途方に暮れる日々が続きました。そんな中、活動してきました、20年間の思いは日々大きくのしかかり、時に懐かしく、時にこのままでやめてしまっていいのか、と煩悶したり、打ちのめされたりの定まらない毎日が続きました。しかし、だからこそ、殺伐とした世の中で忘れてはいけない心の仕事だと、今一度原点回帰で仕事をして行こうと、再度のオフィス再開を決意いたしました。長谷川芳博新会長の応援と、励まし、変わらぬお力添えに奮迅してくださいました理事の皆様に感謝の気持ちで一杯です。登記や変更手続き、HPの開設、新事務所の設立と大忙しの日が一段落し、やっとここに報告をできるまでになりました。

時代の流れも大きく激しく変わっていくと思われる今後、相変わらず心づくりの活動や、子どもたちへの寄り添いを忘れない活動をしてまいりたいと存じます。お力を是非お貸しくださいませ。

事務所は京成高砂駅、イトーヨーカ堂の真裏という便利で、人通りの多い下町のど真ん中です。是非お立ち寄りくださいませ。

母子生活支援センター　NPO法人日本ららばい協会
〒125-0054 東京都葛飾区高砂3-13-13三浦ビル1階
TEL:03-6458-0283 FAX:03-6458-0284

これからの日本ららばい協会の事業内容

- **子守唄資料室開設**
  従来の全国の子守唄の保存、蒐集、普及
  場所　市川市国分3-22-3
- **相談ルームの開設**
  家族問題　女性問題　虐待、現代がかかえる諸問題を各分野の専門家、カウンセラーが直接対応、または書面などでお受けします。
  面談、相談日は毎週木曜日です。
- **子どもの虐待相談**
  虐待予備軍の大人たち、子ども自身からの相談に対処します。
- **虐待全国ネットワークづくり**
- **ららばい支部募集**
- **寺子屋巡回事業**
  江戸に学ぶ寺子屋の巡回を北斎学会と連携して開催します。
  第一回目　北斎と子守唄
- **世界で一番小さな美術館開催**
  子どもの創造性と心の解放に小さな空間をまず観てください。
  新事務所のわずかな空間が子どもたちの驚きの場になりました。
- **こどもたちにおむすびを配布**

Lullaby

日本ららばい協会

会長、理事長、理事のごあいさつ

虐待防止は日本の課題

会長　長谷川 芳博（長谷川トラストグループ株式会社代表取締役会長）

20年間、日本の文化と伝承の大切さを子どもたちに伝えようと活動をしてきた、「日本子守唄協会」は、子守唄を通じ未来への「心文化」を担ってきたといえます。

名称を新たに、更なる発展をめざします。

世の中は情報化が進み、文明や科学は発展し続けていくなか、更に世界中を覆っている疫病の蔓延は止まりそうもありません。どう対処するかに、私たちの叡智が問われています。

そんな中、子どもたちの置かれている状況は、決していいものではありません。

協会が取り組んでいた「虐待防止」への取り組みもこれからが正念場といえます。

私たち人間の、大人としての責務のなかには、子どもたちへ今よりは少しでも希望が持てる世の中であるよう努める努力が必要となってきました。

これからは今までのステージとは明らかに違う世の中になっていくでしょう。

臆することなく、ピンチをチャンスに切り替えて、新しい人間復活の場としての活動をしていかなくてはなりません。

多くの皆様のお力を頂き、時代と子どもたちによりそう活動の拠点となるよう、新事務所からの再出発の気持ちで、会長としても尽力して行きたいと考えています。

原点を忘れずに

日本ららばい協会 理事長　西舘 好子

時代は刻々変わると、頭では理解し感覚では充分承知していたはずが、こんなに、目の当たりに日常の風景が変わり、得体のしれないウイルスにおびえて暮らすようになるとは。

数か月、毎日感染に一喜一憂しつつ、真っ白になった時間の中で子守唄協会の総括を考えざるを得ない時間が出来ました。

結果、人間の基本は幼児期の育ち方にある。

子守唄を歌えばすべてが解決するわけではなく、その原点にある母親の生きよう、ありよう、人間の慈愛と表現力が、子どもに影響するという、母子の基本はどんな時代になっても変わるはずがないという信念は変わりませんでした。うけつがれてきた日本の文化は心の宝物です。

うけついできたものを次世代につなぎ、広げていこうと思います。そのためにも、時代に合った、柔軟な手法や仕掛けを「日本ららばい協会」は打ち出し、活動してまいりたいと、新拠点を作りに出発します。

虐待防止支援を

理事　相川　厚（医師）

今年はコロナウイルスの影響で、子守唄に関するイベントができずにいるのがなんとも口惜しいです。この困難な時期に日本子守唄協会は、新たに日本ららばい協会として立ち上がりました。まず新事務所を開設して、そこに母子生活支援センターを開設して、親や子どもたちから直接話を聞くコーナーを設置いたします。ステイホームの状況が長く続き、親子で家庭内の時間を楽しんでいる家族もいれば、こどもへの虐待やDVが増加して家族がバラバラになっている家族も存在します。日本ららばい協会は子守唄の本質である親の愛情が子どもたちに温かいぬくもりとやさしさを与え、子どもたちが安心して成長できる環境ができるように願って、活動しています。今後は虐待防止や虐待を受けた子どもたちを

支援する活動も積極的に行っていきたいと考えています。

すべては明るい家庭から

理事　阿部 輝彦（株式会社慶傳社代表取締役社長・会長）

〝子守唄の普及啓蒙〟と〝子どもの虐待防止〟をテーマに全国を巡回してきた日本子守唄協会、地道な活動から二十余年、次へのステップが期待される日本ららばい協会。

コロナ禍で世界中が混迷の中、この八月活動拠点を京成高砂に移し、新会長を迎えて新しい生活様式とともに九月、第一歩を踏み出す。

「笑顔のある明るい家庭づくり」を標榜し、直面する諸問題と教育・育児・」医学・芸術等の分野に巷で活躍中の先生方にボランティアで参加をお願い。フェーストフェースで対応し明るい輪を広げる運動を提唱。気楽に来所していただき相談にのってあげられたらとその方法を試案中。小さな一つから展開出来たらと念じています。

9月3日発表のユニセフの報告「子どもの幸福度順位（38ヶ国調査）」によると日本は「身体的健康」では一位で経済的にも比較的恵まれているにも拘わらず、生活満足度の低さ、自殺率の高さから「精神的幸福度」が37位と最低レベル。その他の「学力・社会的スキル」と3分野で指標化され総合では20位。

日本ららばい協会への期待と負う責任の大きさを痛感、新たなる挑戦に皆様のご理解と応援を望む次第。

新しいスタートに寄せて

理事　井上 麻矢（劇団こまつ座代表取締役社長）

今年は新型コロナウィルスの影響で子守唄のイベントも開催が出来ませんでした。

早々に収束するかに思えたウィルスの蔓延も未だ先行きがわからない中に私たちは立たされています。

そして経済的な面だけでなく、精神的に追い込まれていく人達がこれから益々増加してくるであろうと言われています。

そんな時、何が大切になるのでしょうか。

今さかんに言われているソーシャルディスタンス（社会的距離）もしくはフィジカルディスタンス（肉体的距離）だからこそ、人は本当の意味で心の距離を求める時代になってくるのではないでしょうか。

新しいらばい協会はこれからの時代の大きなスタートを切りました。すべては新しく始まるのだという期待、そしてこれからもそんな心の距離の仕事に従事することを誇りに思いつつ、理事の職務を全うしたいと思っています。

皆さまのご支援を引き続き宜しくお願い申し上げます。

母子生活支援センター」で私達が出来ること

理事　神長倉 万美子（株式会社フリーライド企画制作）

日本子守唄協会は、20年もの間、子守唄を通して母と子の絆をテーマに子育て支援活動を行なって参りました。コロナ禍で全てのライフスタイルが大きく変わりました。そして今、私達に出来る事を見つめ直しました。

「日本ららばい協会」として、今までの経験の中から、「未来を担う子どもを守る」活動をしていきます。

「母子生活支援センター」では、虐待をしてしまう大人や虐待されている子ども達に、心の安らぎの場を提供したいと考えています。虐待をしてしまう背景には、子育てのストレス、経済的困窮、人間関係の疲れなど様々な事情があります。一人の大人を取り囲むそれらの環境が、不幸にも虐待という形で子ども達に降りかかっているのです。

日本ららばい協会は、一人でも多くの親を子どもを助けることが出来るように活動をしてまいります。

皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

日本ららばい協会の今後

理事　北島 成治（株式会社KIS代表取締役社長）

NPO法人日本子守唄協会より名称を変更して、NPO法人日本ららばい協会へと生まれ変わり、心機一転、新たな事業も加え、人のつながりを大切に前進していきます。

事業の見える化を目指し、皆さまが参加しやすく、多くの同志が出てくるような現実的な活動を推進していきたいと思いますので、皆様のご意見等これからも多数いただけると助かります。

人のつながりが協会を必ず良い方向へ導いてくれるものと信じ、頑張っていきたいと思います。

優しい社会をめざして

理事　剱持 英子（カフエ・ド・カオリ　オーナー）

協会のお仕事の暖かさをずっと見続けてまいりました。

家族の大切さ、友達の大切さ、地域の大切さ、教育や政治の大切さ、生きる事すべてに優しさや慈しみがどんなに大切か、それを育み、その心を人から人へつないでいこうという活動は、陰から観ていても並大抵の事ではなかったと、実感しました。

私の住む松戸市でも、楽しいイベントをしていただきましたが、唄や遊びを通して観客が心をひとつにして、暖かな時間を共有することができました。

一方、虐待やいじめに苦しんでいるお子さんたちが、未来を閉ざされ、苦しんでいるという現実も肥大しています。理事となり何らかのお手伝いをして行きたいと思います。

生まれてきてよかった、という思いが育つよう、子どもたちが生きていくことを願うばかりです。

新たな門出に寄せて

理事　徳永 雅博（社会福祉士）

この度、20年目を迎えたNPO法人日本子守唄協会が、名称変更をして、新たにNPO法人日本ららばい協会としてスタートしたことに、心からお祝いを申し上げます。

これまで子守唄のイベントや研修、虐待防止を含めた様々な子育て支援の企画を考えてきましたが、新たに「母子生活支援センター」を開設して、子育て環境の総合的な相談窓口を開設されたことは、画期的なことだと思います。

コロナ禍で、テレワークやソーシャルディスタンスなど新しい生活様式が求められています。しかし忘れてはならないのは、親子の絆や子どもたちの未来をどうして守るかです。

虐待相談件数が増え続ける中、子どもたちや親子の居場所が分からなくなってきています

こうした問題に日本ららばい協会が正面から向き合い、伝統的な子守唄や童謡の魅力をベースにして、心が触れ合う親子のあり方、新しい生活スタイルを表現していければと願っています。これからの協会の活躍を大いに期待しています。

新園舎に感謝して

理事　藤澤　昇（岩手愛児会 会長）

新園舎が2月29日に竣工した。現場からの新築計画立案から10年を要した。急増する虐待児の最後の、最後の受け皿は我々のような施設である。

旧園舎はその子ども達で8人部屋が常に満員であった。子ども達は避難させられた狭隘の居場所で仲間と心を寄せ合い、直ぐ子どもになった。（施設伝統の療育観の存在）

それでも突然やってくる心の傷が疼くと、それが静まるまでみんなが待つしかない。お互い様なのである。（施設の新養育観の必要）

ある時この子ども達に、「子守唄って知ってるか」と聞いたことがある。「う～ん、て言うか婆ちゃんに聞いたことがある」と中学生の男の子が話した。（地域養護の必要）

新園舎の地域交流ホールは「こもりうたホール」とした。そして、児童相談所の機能を持つ一時保護専用施設を「ゆりかご」とした。

子ども達は落ち着いた生活をしている。

増え続ける虐待に、子どもの目線にたって活動をしつづけて行こうという協会の姿勢に私も賛同参加し、前進していきたいと思っている。

新園舎は完成しましたがコロナ騒ぎで、まだオープン行事は一切行われておりません。

そんな中、棟方志功さんの唯一の愛弟子である版画家の井上勝江さんが新園舎の五つの部屋と、併設されたこもりうたホールへ、自作の版画を、制作寄贈してくださることになりました。新作を制作、寄贈、しかも部屋の名前に合った版画を、との申し出を伺った時はびっくりしました。　持病の為、長いこと入院を余儀なくされている井上さんでしたので、体力が持つのか、と心配でした。

増え続ける虐待と被害にあう子どもたちの事を心配してる井上さんは、心と身体に傷を負っている子どもたちへの愛情と未来へ

の祈りを込めて、制作に打ち込んで下さいました。

寄贈される作品はこの八月に京王プラザのギャラリーで一般公開され、多くの皆様に観ていただきました。寄贈された版画は、現在刊行予定の井上勝江画集に収録されます。

こもりうたホールの大きな版画は遠くからは風船が飛んでいるようにみえ、近くに行くとその中に優しい手書きの画が描かれています。

岩手のこの場所に行かなければ現物は観られないという貴重な作品たちです。

子どもたちの心にそっと記憶されればいいのよ、という井上さんの言葉が慈母観音の様でした。

西館記

こもりうたホールにかざられる井上さんの作品。

INFORMARION

ららばい母子生活支援センターにて
皆様の悩み相談受け付けます

- **育児、教育、虐待などで悩んでいる大人から子どもたちまでの、諸々の相談を受け付けます。決して一人では悩まないで、どんな小さなことでも、また、困っていることを相談し、飛び込んで来られる場所を作ります。Faxやメール・手紙などどんな手段でもかまいません。**

専用電話／**03-6458-0288**　専用FAX／**03-6458-0289**

- **毎週木曜日を個人相談日といたします。基本的には事前に予約が必要となります。**

＜ 相 談 員 ＞

◆**藤沢　昇**（養護施設岩手愛児会会長）
虐待防止への取り組み一筋に取り組んできました。

◆**相川　厚**（医師）
東邦大学名誉教授　子どもの腎移植の第一人者。

◆**徳永雅博**（社会福祉士）
区議としても活躍。

◆**樋田敦子**（ジャーナリスト）
虐待、いじめ、介護などの取材や著作書で活躍。

◆**土濃塚達也**（夢の玉手箱主宰）
虐待の少年たちの卒園後の身の振り方を応援しています。

◆**赤枝恒雄**（赤枝医療財団　医師）
六本木のエイズ無料診断の活躍はつとに有名。

◆**小畑たか子**（幼児教育アドバイザー）
教員生活の後、個人的な相談室を開設しています。

◆**米野宗禎**（元幼稚園園長　曹洞宗僧侶）
幼児向け出版社「チャイルド」から幼稚園園長、名物園長でした。

他多数

- **又協会では、未来の子どもたちへの心理カウンセリングなどボランティアを募ります。**
- **保護施設、養護保護期間を終えた少年への未来支援も展開していきたいと思います。**
- **相談が相談で終わらないようにネットや支援団体とリンクしてまいります。**

相談業務の充実を目指して

西舘 好子

私たちは決して一人では生きていけません。生まれ落ちた瞬間から誰かの手を借りなければ、生きられないことが宿命づけられているのです。

丈夫に健やかに育つという事は育ててくれる誰かがいるということです。

無垢で無意識のなかで誕生してくる命、幼児期の時間は、まさに、未知の世界から知らぬ宇宙に旅して来るに等しいほどの驚異と冒険の時間に相違ありません。

まさに命は奇跡から始まり、初体験を経験しながら私たちは大人になっていくのです。

その「命」の芽生えを、誰もがが讃歌と揺り籠の中に受け止めることが出来たらどんなに素晴らしいことでしょう。

子はやがて、家族という大切な中で育ち、学校や社会や世界へと、人とのかかわりの中で、生を全うして行くはずです。かけがえのない生涯の出発を私たちは先祖の代から、いいえ、もっと昔の太古の時代から繰り返し、命のバトンタッチをしてきたのです。

子を育てるには、神に祈る、といった子どもへの大人の願いと、未来がこめられていました。子育ては優しい心のこもった言葉でした。

今、私たちの社会では子どもたちの「育ち方」をめぐって大きな変化が起きています。

「神からの授かりもの」などと言ったら一笑されそうな現代、子どもは「作るか」「産むか」の対象であり、未来への人的投資という論も出てきました。

科学的根拠などでも、親となる大人たちの意識が大きな変貌をしてきたと立証されました。

事情があって「産まない」という選択使もあれば「人工授精」という手段もあるのです。それらの変化は時代の流れの中で止める事も、否定する事も出来ません。

家への帰属観や価値観が変わり、結婚の機能やそのあり様、女性の社会参加や能力など、考えれば、男性は仕事、女性は育児といった昔の構成がもはや成り立たなくなって来ているのも事実です。経済状況も各人にとって大きな意味を持ってきました。

今の女性たちの多くは結婚や出産を経験する前になんらかの型で社会で働く経験を持っています。

自分の能力が活かされ社会と繋がっている充足感を体験した後に、子どもは母親が何よりと言った従来の育児の正統性にさらされたら、独りぼっちの育児に閉塞感、孤独感を感じるのはいかばかりか、想像がつきます。

少子化、都市化、密室化で赤ちゃんを抱くのは初めてという事に戸惑いがあっても不思議ではありません。

まして地域に相談する環境がないとなればなおさらに違いありません。

私は「子守唄」という、昔からある育児のストレス発散の知恵を現代に活かせないか、と「日本子守唄協会」を21年前に発足させました。

残念ながら子守唄を聴き、唄う母子の環境は日々薄らいできています。

しかし、それは形を変えて、未来永劫に繋がっていく「心のたからもの」であることに変わりはありません。

幼児期の育ち方がその子の将来にどれほど影響があるか、という信念は今も変わりません。子どもを取り巻く環境の変化から到底目を離すことは出来ないとの思いです。

今春、突然に襲ってきた新型コロナウイルス感染はあっという間に世界を覆い、今もその流行は止まる事はなさそうです。

「ウイルス」という目に見えない細菌は、性質の悪いことにどのように変貌していくか予想もつかないほど、手ごわい細菌です。

流行の風邪に過ぎないという人もいる代わり、人類は最後はウイルスによって滅びるという科学者もいます。

予防薬はこれもまた実にあやふやで、数か月たった今、恐怖は絶望になり、経済逼迫、ストレスで異常な行動が人々の間に蔓延してきています。

毎日何人かの人の感染のニュースが流れ、報道はコロナ一色です。

私たちが住む日本という国の歴史はその精神史において世界でもかなり特殊なように思われていて、我慢、忍耐、清潔さ、などの美点が取りざたされていましたが、それももはや限界に来ているように感じます。

他国ではすでに暴動や医療破綻、経済悪化、殺人や発狂事件までも起り始めています。

そんな現状では「子育て」はますます難しく困難になっていくことが目に見えています。

そんな中、母親たちの悩みはより肥大していっています。

保育園や幼稚園が休園となった瞬間から、母親たちは日々子育てへの疑問と、孤独感にさいなまれ、ネグレストや虐待は増え続けています。

子を置いていったために亡くなった事件では、母親を悪と決めつけて盛んにテレビが報道しますが、虐待や未婚や離婚での母子家庭への情報は全く報道されません。

センセーショナルな事件性ばかりがクローズアップされ、全く片手落ちと言わざるをえません。

「子育て支援」という名ばかりの支援は何だったのだろうか、と私も考える時間が長くなりました。

子どもを母親だけに任せるのは果たして本当に子育て支援といえるのでしょうか。

母親がいくら熱心に努力しても、それは無理という物、その責任が重くのしかかったとき、母親自身は育児不安と孤独にさいなまれます。どうしても母親以外の人の力、経験や知恵や関わりや心が、子育てに活かされてこその子育て支援という仕組みが今の日本には一番必要なのではないでしょうか。

はたと思いました。

早10年は経っていますが、私は、インド、オーストラリア、中国、フランス、という国にDVの現状取材に行きました。

その時どの国にも、相談というシステムが完備していて、多くの女性たちが気軽に訪れるのに接し感心したことを思い出します。人に悩みをいうことは恥ずかしいことではなく、未来への大きな出発になると実感しました。

大人だけではなく中国は子どもたちが自ら虐待の訴えをする場所を持っていて、その訴状作成は、中国北京大学の法学部の力を借りていることにびっくりしました。中国北京女子聯合会という組織が仲介していました。

オーストラリアでは多国籍国家の為、虐待やDVは文化の違いの争いになります。

それらをグループで支援していました。自立支援という中で一人の女性にかかわり未来に寄り添っていくのです。

行政や仕事のなかでの論理性や抽象的な内容では何も解決出来ないのが人生です。出来るなら、この時代の女性たちの家庭や子育てに関しての相談に多くの皆さんが参加し応援していただけないだろうか、人は決して一人ではないのだという思いがふつふつとわいてきました。小さな試みですが、生活と日々の体験をより豊かにする為に、子育て支援の本筋の目的は、すべて小さな命の子どもが育つ為、より育てる親を応援するという事が大切だということのように思えました。

また、子どもが育つには沢山の大人と、それも人間的な大人たちと出会う事が何より大切です。親もまたその一人に過ぎない、そうあるべきだと私は思います。

そこで、コロナから学んだのは、次なる挑戦として新しい出会いの場を用意したいと考えました。新しい事務所に早く皆様が気軽に立ち寄れるよう今から準備して行きたいと思いました。その日の来ることを願いながら。未来は子どもたちの手の中あり、子どもたちへの支援を失くしては大人たちも救えないのですから。

母を考える

日本ららばい協会　理事長　西舘　好子

まず母のいない人はいません。父のいない人もいませんが、事情があれば判明しない場合もあります。

母は妊娠、出産、子育ての三重苦をわが身に受け、時間を経て、「子ども」という存在をこの世に送り出します。

母はどこまでも永遠に子についてきます。

別れてしまおうが、離れていようが、たとえ、死んでしまったとしても、自分の中から切り離したり、忘れようとしても、振りほどこうとしても、おんぶお化けのように自分の背中にのしかかっています。

のしかかる親も大変でしょうが子になった者も実は大変です。

容赦ない感情をぶつけてきたり、愛情過多も冷酷なまでの薄情さ。平気でさらしてくるし、口臭も厚化粧も何のその、醜さ、傲慢さ厚かましさ、いえいえ押しつけがましい、やかましい、こざかしい、騒がしい、「がましい」の限りをさらす母の子への無防備な感情を生命力とは到底解釈できない。それが自分の母親なのです。

といって、少し冷静に　他を横目で観れば、親子がお互いにほめあう、抱き合う、許しあうなどの情景は、どこか嘘っぽく異常で気味悪い。

そんなうまくいくわけないだろうとつい勘繰りたくなってしまうのです。母が子をそっと見守る、見送る、など映画のワンシーンぐらいにしか思えないのですが。

「子を捨てる藪はあっても自分を捨てる藪はない」

そんな格言の中に残酷で無慈悲な女の性と業があるのではないでしょうか。

昔の女たちは子を沢山産みそのうちの、何人かを自分より先にあの世に送っています。

命が連鎖して繋がっていくことにすがって、すぐに立ち上がるのも母親です。

命が終わることを承知して納得し、命への限りない信頼をベースに生きつづけます。

だから「子守唄」という生死の唄を歌い、再生できる命のカギを握っている残酷さを武器として永遠に生き延びていくのでしょう。

母はどこまで行っても母なのです。何があっても母なのです。嫌でも自分と似ている部分があるので、子は認めざるをえません。

離れたり、病の床に横たわる姿を観たり、苦労した姿を垣間観たり、老いが隠せなくなった姿を見たりして、やっと私たちは母を子のように包み込むことが可能になるのかもと思うと「愛しい」という感情が最後の親への讃歌といえるでしょうか。

どこからか終わることのない子守唄が風に乗って聞こえてきます。あれはたしかに私にだけ歌われた母の声にちがいありません。

特別寄稿

母という「魔法」

エッセイスト　せがみ みほ

せがみみほ（瀬上美穂）
東京生まれ
文化学院高等部英語科
アジアアフリカ語学院
ヒンディー語学科研究科卒業

母の死の数日前、ふと気づいたことがある。最初は病室の配置が変わったのかと思った。いや、変わったのは私のいつもいる位置だ、そう思った。母から見て左手に、私はいつも読みかけの本やスマートホンを片手にいた。転院してからずっとそう。それが、この所ずっと右側にいるからかもしれない。

でも何かが違う。

私は壁の掲示板のコルクボードを見た。転院して間も無く屋上へ出た時に撮ってもらった写真から数えて4枚、毎月のイベントの写真が飾られていてそれは同じ位置。私たち姉妹の幼い頃の写真、最後に行った熱海旅行の写真も同様、何も変わったことはない。

病室は、母の指示で色々なものを運び、配置したのだった。大きな龍の絵、花瓶の花、振り子時計、たくさんの写真。ただ、それらが、段々、色を失っているのだ。

ここは、ドアの正面なので、出入りする人の様子、表情、言葉などが見えやすかったが、見ないでおきたいなと思った。何しろそれは、モノクロの世界だったので。脳貧血で倒れる前の風景みたいなそれは、全然歓迎できるものではなくて、でも段々と周りの色を奪っているかのように見えた。

昨年2月に転移したがんは、母の歩行を奪った。ボルト手術後の極度の貧血、院内感染のインフルエンザと毎日色々なことが起きて、今までお産以外入院したことない母、入院してもなるべく一人でなんでもこなしていた母はさぞかしショックだっただろう、何日か何処かへ行ってしまうという、精神的な症状もでた。そんな毎日だった。

ある早朝母は、大学病院の看護師さんに「もう治療はしたくない」と話し、その直後、家で眠っていた私に電話をかけてきた。「みほちゃん？あのね、あたし、もう治療は受けないことに決めた」。

ホスピスの選択肢は、家族にとって大きな問題だったが、はとこが終末医療の現場におり、その内容を聞いたり、母の従姉妹のおばさんと病院へ実際に出向きお話を聞いたり、周りの人の助言を受けたりしていくうちに、そして何より、母の強い希望があり、転院の方向で話を進めることになった。

「お母さん、ホスピスへ行くってことは、もう死がゴールだよ？わかってる？」最初、私はこう言った。

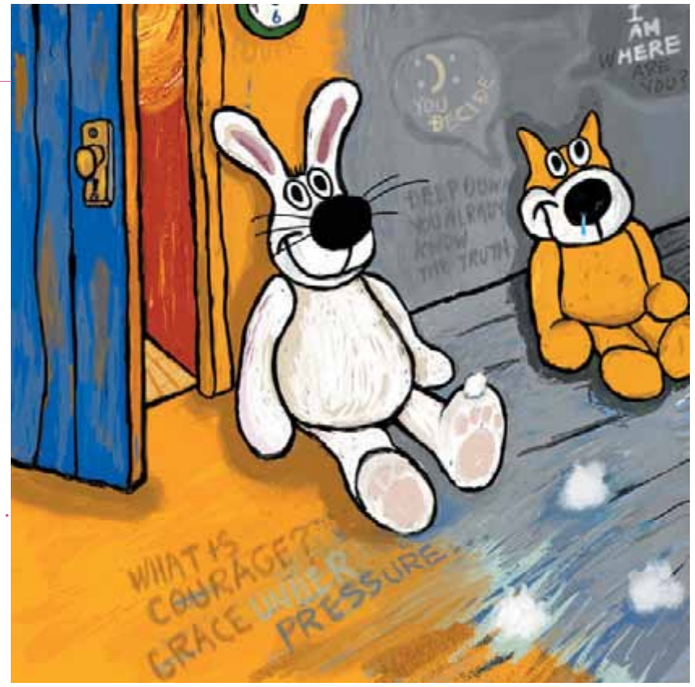
「わかってるわよ」母はきっぱり言った。

母の母である祖母はくも膜下出血で、病院に運ばれ、病室のベッドに正座し皆に「ありがとうございました」と言った後、意識を失い、40日後に亡くなった。私たちの父も、2度の開腹手術後、亡くなる前日に目を覚ましたけど話すこともできずに息を引き取った。やはり40日後…

母の希望は、命ある限り、しっかりと意識のある状態で皆とその時まで生き切る！ということだった。

母は転院した。リハビリも頑張り、来てくださる人とはたのしくおしゃべりしていた。痛み止めは自分で決めた間隔でのんでいたようだ。

花は主に次女が買ってきて、三女はいろいろ頼まれごとをこなし、私はいるだけだが、毎日誰かがおり、病室でふだんみたいに過ごした。病室は明るく、キラキラしていたように記憶する。



<イラスト>

瀬上 マキ
文化学院高等課程美術科卒業。
1997年　第10回グラフィックアート『ひとつぼ展』入選。
以降、リクルート年末チャリティー展
1997ー2013出品 個展　多数

6月に食事ができなくなった。

私たち姉妹は全員6月うまれで、母は誕生日会を病室ですると提案した。

母主催の誕生パーティーは、母が、ずっと食べたいと言っていたパエリアとピザ2枚、それとケーキを母がご馳走してくれたのだが、母は一口も食べることが出来なかった。私たちは、わざとおどけたりしながら、おいしいよ！ありがとう！などといいながらごちそうを、ほおばった。

母は、「ごめんね、せっかく買ってきてくれたのに無理だわ」と言った。でも、うれしそうに、「おいしい？よかったわね」といつものようにいうのだった。

その後2ヶ月、母が何か食べていた記憶がない。どうして、何も食べずに平気だったのだろうと思うのだ。あんなに毎日ずっとそばにいたはずなのに、おもいだせない。それなのにいつも、私のくだらない話に耳を傾けていてくれた。本当に意識がなくなるその日まで、喧嘩さえしていた。

夏になった。だが病室は母の体調に合わせ、寒かった。

8月は迎えられないかもしれないと思いながら、毎日病院に泊まっていた。

母は東京の下町生まれの下町育ち、家族でワイワイ暮らしていたので実はとてもさみしがりだ。

私たち3人を集め、ふつうに、あたし、今日死んじゃうから、と言った時も、みんな冗談かと思った。

翌日からお水がのめなくなってきた。母は一生懸命自力でのみこもうとしていた。様々な症状、痛みはおそらく想像を絶したと思われる。が、それでも母は、皆と普通に会話しようとしていた。

とうとう 母が喋らなくなった。

これは普段具合がわるくなったりすると、誰とも口をきかず、一人で野生動物のように寝て過ごしていた時と似ていたので、私たち姉妹はようやくただならぬことであると気づいたのだった。

私が、モノクロに反転する部屋に気づいたのが、思えばこの日の早朝だった。たんを自力で出そうとがんばる母と朝日を見て、その美しさに「わあ、キレエー」と言ってくれたのが嬉しかった。

その前々日末妹に「お世話をありがとう」と言い、前日は真ん中の妹に言い、今日は私だった。

「みほちゃんお世話をありがとう」

「当たり前じゃん、何言ってるの」少し乱暴に私は言った。小さなあたたかい手が私の手を握った。部屋の外は私たちの大好きな新宿の朝焼けが広がっていた。

それからだった。私はずっとこの右側にいた。何故なのかはわからない。

部屋のモノクロの反転は、どんどんその間隔

を縮めている。絶やさなかった花、時計の刻み。寝泊まりしていた皆んなが病室でそれぞれ、なるべく楽しい会話を試みていたその時、ベッドで目を閉じていた母が、起き上がり「みんなのストーリーはよく聞いてわかったわ。みんな、ありがとうございました」と、あいさつをしたのであった。

そして、病気になってはじめて、本当に、私は痛いから、早く楽になりたいと訴えた。

母はその後三日間、眠り、そしてゆっくり息を引き取った。私はそれを見守り、看取ることができた。

そのあと、いきなり色彩が戻ったのはいったいどういうわけなのか、不思議でならない。私の人生の残りの彩りなのか。

母の選択肢を、私たち家族はなんの迷いもなく受け入れたけれど、それは最後まで闘ったことにならないという意見もあると聞く。そうだという意見も否定しない。正解はない。

母は満足してくれただろうか？

おそらく100％満足よ！と言っているはずだ。でも、予想外に痛かったワ、なんてことも言いそうだ。次に会った時。

思えば母の「魔法」で私たちは生かされてきたように思う。

大きな家でも、小さくなった家でも精一杯工夫し、持ち前のセンスで乗り切る。なんとかなるわよ、といいながら…。ずっと母であり続け、それ以外はどうだったのかわからないが、最高の母だった。

「子どもを守る」ということが生涯の使命だった「うちのお母さん」だが、天国では少しのんびりして、自分のすきなことをやっていてくれてるといい。

その後引っ越すことになった。片付けをしながら、母の、いろいろ知恵をしぼった部屋の配置、洋服の収納、台所の調味料、食器、最後思い出の品が何だったのか確認する。

片づけ終わるとのっぺらぼうの部屋に唖然とした。母の住んでいた時は本当に豪華であたたかかったから。

これも「魔法」だったのだ。

私と次女は結婚を経験せず、ほとんど母とくらした。子どもはずっとそばに置きたい、私たちが小さい頃のそれは母の望みであり、彼女はある意味思うままに生きたといえる。こういう望みがあってもいいし、これという親孝行というものをしてあげられなかった私は、それをすこしでも叶えられたと思うと本望なのである。

母守唄
母は焚き木です
（玲風書房）から

国見 修二（新潟県出身 詩人）

母は少女です
おかっぱ頭の少女です
水玉模様のワンピースを着たー。
母は麦わら帽子です
かき氷の甘さを残し
海へと飛ばされる麦わら帽子です
母は田舎です
盆踊りの田舎です
アンプの音が絶叫する短い夏のー。
母は赤とんぼです
指先にとまる赤とんぼです
その子は今も泣き続けています

母は紙芝居です
春夏秋冬の紙芝居です
終わりのないハッピーエンドです
母はホタルイカです
包み込まれた笹の香りの節句です
柱の傷は誰ですか？
母は味噌です
自家製の味噌です
吊るされた帰所で家族を見守る味噌玉です
母は金太郎アメです
泣き笑いをした金太郎アメです
一個一個の表情の違う新型金太郎アメです
母は海です
果てしない青い海です
水平線が海にとけ込み飛魚が（母）の文字に
突き刺さります

連載

世界子守唄紀行
第26回「アフガニスタンの子守唄」

鵜野 祐介（立命館大学教授）

昨年（二〇一九）一二月四日、アフガニスタン東部ジャララバードで、現地の人道支援に取り組んでいたNGO「ペシャワール会」の現地代表で医師の中村哲さんが銃撃を受け逝去した。「生きるため傭兵になる男らを緑の大地に導きし人」（こやまはつみ）、「アフガンに懸けし生涯冬北斗」（縣展子）……（「朝日歌壇・俳壇」一二月二二日・二九日より）。

「自分は一介の臨床医で、もの書きでも学者でもありません。ただ、生身の人間とのふれあいを日常とする医師という立場上、新聞などでは伝わらぬ底辺の人びとの実情の一端を紹介することができるだけです」（『アフガニスタンの診療所から』ちくま文庫二〇九頁）と記し、長男の健さんに「俺は行動しか信じない」と語った中村さんだが、若き日に傾倒した思想家として内村鑑三、宮沢賢治、西田幾多郎、カール・バルト、ビクトール・フランクル等の名を挙げているように（『天、共に在り アフガニスタン三十年の闘い』NHK出版四五頁）、その行動は深い思索に裏打ちされたものだったと感じられる。

「天、共に在り」…本書を貫くこの縦糸は、我々を根底から支える不動の事実である。やがて、自然から遊離するバベルの塔は倒れる。人も自然の一部である。それは人間内部にもあって生命の営みを律する厳然たる摂理であり、恵みである。科学や経済、医学や農業、あらゆる人の営みが、自然と人、人と人の和解を探る以外、我々が生き延びる道はないであろう。それがまっとうな文明だと信じている。その声は今小さくとも、やがて現在が裁かれ、大きな潮流となるらざるを得ないだろう（同右二四六頁）。

マルワリード用水路A、2009年4月22日

左とほぼ同じ場所、2003年12月11日

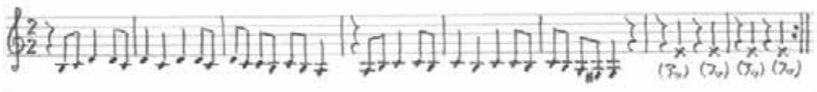
アフガニスタンと「子どものうた」で思い起されるのが、二〇一二年八月シリアのアレッポでやはり凶弾に斃れたジャーナリスト山本美香さんの次のようなエピソードである。一九九六年、彼女にとって初めての紛争地取材となるアフガニスタンのある民家で、赤ちゃんを抱いた母親は突然現れた異国からの訪問者に怪訝な表情を浮かべ会話は成立しない。その時、山本さんは日本語で「大きな栗の木の下で」を歌い始めた。おそらく身ぶり遊びもついていただろう。すると母親は表情を崩し、笑い声を上げ、そのうちに赤ちゃんをあやしながら一緒に歌い出したという（山本美香・日本テレビ編『山本美香という生き方』新潮文庫二四頁）。この母親が普段わが子に歌っていたのはどんな子守唄だっただろうか。

一九九三年五月二一日にオンエアされた英国BBCラジオ3「子守唄」の中で、シンプルだがアラブ特有のメロディを持つアフガニスタンの子守唄が紹介されている。歌詞はパシュトゥー語だろうか。解説によると、生後一四日間が最も危険なのでアッラーの神にわが子の無事を祈る内容の歌詞だという。また「アッ」「フッ」は揺りかごを押す音だとも。

中村さんや山本さんもどこかでこの子守唄を耳にしたかもしれない、そう夢想してみる。

故 中村哲氏

（上の写真は中村哲『アフガン・緑の大地計画』P（J）MS&ペシャワール会より引用）



INTERVIEW

木下晋　いのちを刻む
放浪という現実

【木下 晋】
昭和22年生まれ　富山県出身
日本を代表する鉛筆画の第一人者。中学より美術に傾倒、後に瞽女小林ハル、ハンセン氏病の詩人桜井哲夫さんなどをその死までも追い続け描いた肖像画で独自の鉛筆画の世界を築き挙げた。
幼少期の苦労は貧と母親とのすさまじい葛藤にあった。無一文で放浪の旅を続ける母親との生活は並ではなかったが、今その原点に母親がいたと述懐する。藤原書店からその半生をつづった「命を刻む」が発売された。

藤原書店刊

木下　気が付いて最初から自分の生活はこれはまともではないと思っていましたよ。

何しろ貧しいなんて格好のいい言葉なんて当てはまらない。

「飢える」っていう中で暮らすんだから。小学校の低学年の時に家が火事になり、住むとこは竹林の番小屋、そこに一家で住むことになった。

母親が三回結婚して、俺は三番目の父親の子、上に兄と姉が、弟もいた。

この弟の「餓死」の風景がまだ一枚の絵のように記憶に残っている。父親はトビ職だったけど、火事の後は生活保護家庭だろうね。

母親はと言えばふらっと家を出てどこかに行ってしまう。

「放浪癖」というけど、精神的には知的な障害もあったのだと思う。

兄など連れていかれてしまう。野宿とか畑で大根泥棒なんてするわけで、結局、どうなったかといえば今も精神病を患っている。幼児体験の結果だと思うけど。

西舘　木下さん自身は母親の放浪にご一緒したのかしら。

木下　はい、たった1回連れていかれた。5歳の幼児には苛酷な体験、その後の人生を左右した程です。とてもついていけない。怖いし、腹はすくし、隙をみておやじのところに帰っていく。ぼくはね、まだまともな感覚は残っていたから助かったのかも。

西舘　いや、まだ自分には何処か冷静で、「笑いとばす力」が残っていたと分析しているじゃないですか。

私は、「狂おしいほどの人への思慕」とお書きになっている箇所が、結局、木下さんの根源の力だったと思う。

木下　まあ、その中で生きるしかなかったということですから、結局生きるための選択肢に画を描かなければならなかったという結論しかなかった。今の僕を作ったということですかね。

西舘　正直家庭にあってはまさに修羅、内鬱だらけ、なんか家庭の温かさとか優しさが入る隙が微塵も感じられない、ええ？ まさか、絶句の連続で読み進んでいきました。

それなのに、外の世界にあっては素晴らしい人たちに恵まれている。最初に彫刻や絵を教えてくださった富山大学の美術の大滝直平先生などはきっと木下さんの才能を最初に見抜いた人なのではないかしら。

木下　そうですね、何しろ、まだ中学生のころで、こっちは裸婦まで描ける画室に身を置いている。

本当につくづく人に恵まれたって思う。本にも書いたけれど、生き抜くための手段として画家になれたのもなんだか運命としか思えない。普通は逆でしょう。画家は食えないからあきらめる道なのにね。

高校の時に書いた画が「自由美術協会展入賞」したときからもう一つの世界がどんどん広がっていった感じがした。

その間おやじは昭和三十八年の「三八豪雪」で事故死、兄は施設に入り、おふくろは嫌というほど自分にべったりはりついてくる。どうしようもない家庭の中でもんもんとしている、自分は食えないほどの貧乏と肉親のしがらみから抜けられない。

一方ではきら星の如くの超一流の芸術家たちの世界が自分をとりかこんでいる。

こちらの修羅は自分と闘う集団の修羅だった。よく言えば変な人たちの狂気が伝わってきた。

生活の方は食えないから「看板や」になったり「パン職人」になったりしているのに、なぜか外遊したし、伝説の中の現代画廊主の洲之内徹との出会いがあったり、たいへんよ。（笑い）

西舘　詩人の長谷川龍生さんもお知り合いでしたでしょう。

木下　富山で「おくりびと」で有名になった青木新門さんが「スカラベ」というバーをやっていて、そこが文学的サロンになっていた。その青木さんの変な知り合いが長谷川龍生さん、すごい詩人だけど、どこか自分とは気が合っていて、生活能力は疑問だけれど詩人としての純な感性は持っている。なんと言うか、詩人としての絶対音感的ことばをもっている・・・。天涯孤独なのに悠然としている。

西舘　木下さんに似ているかも。

考えれば挫折したでしょうが、それから自分の画家としての世界を作っていったのには相当な強靭な精神力があったのでしょうね。母親の影響は強そうですね。

木下　誰でもそうだけど自分の母親から逃げられない。

憎んで憎んで嫌悪して、あるときとうとう母親に最大限の暴力をふるってしまった。

部屋を飛び出したものの、ひょっとして自分は母親を殺してしまったかもしれないそう思うほどぶん殴ったので、、半分怖いもの見たさも手伝って、そっと隙間を空けて部屋をのぞいてみた。

途端に母親は私が部屋を出て行ったのかを確かめる様にして「あっかんべえ」をしたのには絶句・・・。まあ、呆然ですよね。この母親にはなぜか叶わない、と思いました。

母親を愛しいなんて思わない、そんな話を美術家・荒川修作氏にしたら「君はすごい母親を持っているね、描くべきはお母さんだよ」。そんなものかと、母親をモデルにしたわけです。

モデル料を払わなくてすむけど、無言で描くというわけにいかない。母親に話しかけたりするわけですよ。向こうは息子だから、すべてをさらしてもなんとも感じない。ぽつぽつ話すうちに、母親と自分の中の何かと同じものが引っかかる。結局母親は僕の画の中で自分を描いた位置にしっかり収まっている。心の放浪が何を意味するのか、最大の課題を母親が自分の画のテーマとさせてくれた。正に画を描く事は母の存在を知る手段でもあった。

私を独りぼっちにして平然としながら私に人生をあずけるが如く頼ってくるのである。

西舘　まあ、そんなこと言ってはなんだけど「愛情飢餓」があるのでは。

私は木下さんの奥さんもよく知っているけれど、無一文の画家志望の男性と駆け落ちして画を描かせる。木下さんは裏切ったり勝手なことばかりしても、じっと凝視している、怖いくらい。奥様の目はギラギラかがやいていた。

木下　裏切ってなどいませんよ。東京に最初に来た時、住む家は家と呼べる様なものでなく荒れていて、その時彼女は、顔色一つ変えなかった。この女を選んだのは正解だったとその時確信しました。それから、俺は彼女で彼女は俺で、というスタンスは今も変わることはないですね。

今女房は病んでいますが、その女房を描いています。病気になってからの方が以前より愛おしい。結局母親も女房も自分にとっては「自分の命」そのものだということなのかも。

西舘　「命を刻む」は単なる自伝ではなく、また苦労話ではなく、木下晋という人を抱擁、許容してくれた母と妻へさらけ出した男の命のドラマなのかもね。

連載

直島便り ⑪

病い癒えて、健康・平和と言う幸せ

南無庵　庵主　山根 光惠
山口県長門市出身
浄土真宗本願寺派 布教使

前回、これまで病気とは本当に無縁であった私が、昨年の八月に突然、脳梗塞になったことを書いた。血圧が高かった訳でもないのに心房細動のために心房部分の血流が悪く血栓ができ、その血栓が脳に飛んで脳梗塞になったという経緯や、訳の分からないまま、それでも運良く後遺症もなく帰ってくることができたことなど、ここでご報告させていただいた。

その後、皆様から「びっくりした」とお見舞いや、「良かったですね」と安堵の言葉などをいただき、本当にうれしかった。

しかし、その後も心房部分の調子が悪いので、とても息苦しい状態が続いた。このように息苦しいまま、これからの人生を生きていくのかと思うと「それも嫌だな」と思っていたら、今は「カテーテルアブレーション」という手術によって心房細動を治すことができることを知った。手術も簡単だというので、その手術を二月七日に、受けることにした。

何とその手術は三時間ほどで終了し、痛くもかゆくもなかった。

入院も三日ほどで済んで、つくづく現代医学の発展のありがたさを感じた。しかし、しばらくしてから、飲み続けていた薬の中のある薬が、自分の身体に合わなかったようで、肝臓を悪くしてしまった。

幸い、原因がその薬であることがすぐに判明したので、薬を飲むのをやめたら、回復した。今のところ体調も少しずつ良くなってきている。そして、薬の持つ怖さも知った。本来ならば、心房細動を治して楽にしてくれるはずの薬なのだが、私にはかえってあだとなったようで、それを飲んでいたがゆえに肝臓を壊してしまったのだ。確かに、薬を抜いたとたんに肝臓の数値も良くなり、身体がとても楽になった。ほんの小さな薬とはいえ、体に与える影響はとても大きかったようだ。

今は、どうぞこのまま、私の健康も落ち着いてほしいと願っているところである。

いつの間にか、時は春。

唯一自慢できる南無庵の桜も、日に日につぼみがふくらんできた。

鶯も、もうすぐ桜が咲きますよ、と知らせてくれているのかのように、たどたどしくも「ほうほけきょ」と鳴きだした。

ちなみに、鶯の鳴き声は「法を聞け」と鳴いているのだと、私が昔、仏教を勉強しているころ、聞いたことがある。

いつもなら「今年は何処でお花見をしようか」とウキウキ気分になる時期のはずなのに、コロナウイルス騒ぎのせいで世界中が沈んだムードになってしまい、いったいいつ終息するのかと気が気ではない。

思い出せば去年は、南無庵の近所の人たちと、美味しいケーキを買ってきて、皆で花を見ながらお茶をして、ワイワイと楽しんだものだった。今年も花見ができるかどうか分からないが、本当は皆、楽しみにしているに違いない。しかし、コロナのことだけでもなく、去年の夏に起こった台風で、海水が風でここまで吹き上げられ、木が塩水をかぶったせいか、そもそも桜のつぼみも、いつもほどはついていないような気がする。

コロナの影響で、世間では子どもたちも学校が休校になるし、人の集まるところには行けず、ストレスが溜まっていることと思う。近年、日本中がいろいろな災害に遭い、それでも皆で頑張って助け合ってきたけれど、ウイルスという目に見えない敵と戦うことになるとは、夢にも思わなかったことである。

それでも、この見えない敵とも対峙していかなければならないのが現実だ。

そして、今年は２０２０の東京オリンピックの年であった。選手はもちろん、多くの関係者が長いあいだ。オリンピックを成功させようと、準備に関わってきた。ただテレビで観戦するだけしかない高齢の私たちも、何となくとはいえ楽しみにしていたイベントなのに、これも延期が決まり、その先行きもまだ不透明なままだ。もうこれ以上の試練はご遠慮申し上げたいというのが、正直な気持ちである。

南無庵があるアートの島、直島も三月になって、いろいろなイベントが中止になったり、美術館が閉鎖になってりして、せっかくの春休みを楽しもうとしたお客さんはもちろん、彼らをあてにした民宿や、飲食店も閉まってしまい、一時は観光客がいなくなった。

それでも、三月の終わりからベネッセの美術館が営業を始めたら、途端に直島と岡山を結ぶフェリーの乗船客もいっぱいになった。みんな外に出かけたくてうずうずしていたのだと思う。しかし、外国のお客さんは極端に少ないし、日本も予断を許さない状況が続いている。

このようなことがあると、皆でお花見ができたり、冬を乗り越えて色とりどりの花が咲き始めた風景を楽しむことは、どんなに幸せなことかと改めて思わずにはいられない。

そんなことを考えていると、三年前に仲間たちと一緒に、モンゴルのノモンハンという、戦前、紛争の激戦地となった場所を訪ねたことを思い出す。平和とは何か、今日私たちが平和を享受できるのはどんなに幸せなことか、過去の愚かな戦争のために、多くの我々の先輩たちが、志半ばで愛する家族を残して死んでいったことか。

次回は、ノモンハンで私が見たこと、そして、今まで知らなかったことを皆様にも知ってもらいたいと思っている。この直島通信をご縁に、有縁の方たちにこの話を知ってもらうために、拙い文章で恐縮ではあるが、筆を執らせていただくことにしよう。自分の出世のことしか考えない為政者たちの理不尽さを今こそしっかり見届けて、理不尽に死んでいった先輩たちのこと、まだまだ残っている彼らの家族のことを知っていただくために。モンゴルの大草原、まさしく事件のその場所で仲間たちと歌った「ねんねんころりよ」の子守唄。そんな体験をお伝えしつつ、皆様にも一緒に偲んでいただきたいと思っている。

次回もぜひおたのしみに。

ノモンハン激戦地に建てた慰霊碑

訪問した全員で江戸の子守唄をうたう。

日本ららばい協会 企画開催へのお願い

江戸から学ぶ子育て学を軸に、いくつかのテーマをこれからの育児、親学に役立て、寺子屋事業として提案させていただきます。

北斎に学ぶ寺子屋 江戸のアート教育と寺子屋サロン

今年、日本のパスポートには葛飾北斎の富士山が登用されました。

オリンピックの年を記念し世界的に有名な北斎が日本の表看板となったのです。

オリンピック憲章には「スポーツと文化の融合」と謳ってあり、レオナルド・ダビンチと比べられる北斎は「江戸中期の画家」として世界的な知名度を誇っていただけではなく、日本文化、漫画の世界的流行からも注目を浴びているのです。

その北斎が、時代の教育の場として流行った「寺子屋」の教則本を沢山書いていたことはあまり知られていません。

当時の寺子屋の風景を描いた絵が残っているばかりでなく、子供たちの為にデザインやアートの基本となる実施の教育にどれほど尽力したか、こども文化が問われる今こそ、知ってほしいのです。

日本の識字力が最も高かった時代、文化の基本となる「絵画」「デザイン」の基とを伝えてくれていたのです。

それは、子供たちの感性をいかに豊かにし、情操を育んだことか、はかり知れません。北斎漫画がこれから世界的流行となる事でしょう。

北斎学会の協力を得て、映像を駆使し、子守唄の流れていた江戸の背景と文化を学びつつ、未公開「北斎作品」の展示も含め、皆様の「寺」で「学校」で「会館」で「町」でサロンを開催していただける事を提案申し上げます。

【開催内容】

❶世界一の教育者　葛飾北斎 伝えたいアート・生活の中の文化お話と朗読

天才北斎は家庭的にも子供との縁においても謎だらけです。

しかし、書き残された絵画からは子どもたちの姿が生き生きと描かれ、寺子屋の教科書には懇切丁寧な子供たちへの絵画指導がうかがわれます。

決して変人と片付けるだけではなく、幼い者への慈しみや愛をもって生活していた優しい北斎の一面もうかがうことができます。

浮世絵をこえて全十三巻刊行された「北斎漫画」は世界を飛び、まるでバイブルのように扱われ始めました。

北斎をヒントにしたお話を朗読し、北斎絵画の紹介を映像から解き明かしていきたいと思います。

❷北斎の子守唄 子守唄が流れていた街づくり

江戸を語る――当時江戸に大流行していた子守唄を通し、子供の楽園であった江戸時代の子育てに触れてみたいと思います。

江戸末期の環境が家庭、地域、政治が一体になっていたことが世界に類のない子供文化を創り出したのです。江戸という時代と背景がなければ北斎はきっと生まれなかったことでしょう。

新しい庶民文化の中で、「生きる」にどれほど心豊かにすることが大切か、生き様と物の見方、考え方は時代を超え、自然と向き合い共生していく知恵を江戸の土壌が作り挙げたのです。

北斎は自然への祈りからとうとう「富士」という素材ににたどり着きます。本草学、天文学、占星術、宗教、数学を駆使して日常を送り、また絵画の表現方法を見つけたのは「生活」すべてに教えがあったからでしょうか。

江戸時代に流れていた子守唄、わらべうたも楽しい風物誌です。時代で江戸の疫病予防に謳われていた唄や行事の案内紹介をします。

21世紀、私たちはマルチな生き方の中から、人間としてどう美学を残し、自分を表現していくのか、悩みの時代から表現の時代への移行を突き詰めて考える時が来たのかもしれません。北斎は常に生き続け最後まで絵筆をとり、あきらめるといったことは無縁な人でした。それほどのエネルギーはどこから来たのでしょう。生き方からも北斎を知り学ぶ価値はありそうです。

北斎の一枚の「絵」を通し、その背景や、北斎の時代の中から私たちは日本のありようを知ることができるはずです。

北斎研究家の話や「絵画」を観ながら「生活学」を垣間見ていきます。

脚本・演出・出演――安井ひろみ
監修・おはなし――藤ひさし（美術評論家）
うたと芝居――歌手・演劇人多数
観客対象――子どもから老人まで
公演所要時間――一時間～一時間半
費用――出演料＋交通費＋制作費用（いかようにもご相談に応じます）
条件――映像のスクリーンが必要です

お問合せ　日本ららばい協会事務局まで

COLUMN

風邪雑感

風邪は万病のもと・・・

そもそも風邪は様々な原因がもとで発症する呼吸器系の炎症の事、あらゆる病気を引き起こす原因になるという、恐ろしいものです。

秋から冬にかけて流行しますが、このころ吹く風が運んでくる悪い邪気を身体が引き込んでしまうというので「風邪をひく」という言葉になってきたようです。

病の意味で使われ始めたのはなんと平安時代、最初は「風」でした。

次いで鎌倉時代になって邪（じゃ）という不吉な気をもつ病として風邪（ふうじゃ）となりました。

江戸時代では風邪は命取りの病気、享保元年（1716）には当時人口5600万人のうち、8万人以上の人が風邪が元で亡くなったと、書いたものが残っています。

この風邪、江戸時代の合言葉に「流行り風邪は十七屋」という言葉があったそうです。十七屋は飛脚問屋、各地を回る人のたまり場から、人の流れに沿って人から人へ感染していったという言い伝えがあるようです。

有名なスペイン風邪として猛威をふるったのは大正期ですがその頃の表記には、この風邪は漢字でこう書かれていました。

「印弗魯英撒（インフルエンザ）」

最初はインドから発祥し、ヨーロッパを経て、18世紀になって全世界に広まったのです。第二次世界大戦真っ只中で、ドイツ、イギリス、フランス、アメリカですでに流行していたに関わらず病状や死亡数は公表されず中立国のスペインが世界に向けて公表したため「スペイン風邪」と認知されてしまったのです。

日本上陸は今から100年前、大正期1918年から1920年ごろに収束するまで日本中を吹きまわりました。45万人の死亡者が出ました。

このスペイン風邪と今度のコロナとは類似しているのでは、という説がありますが、今の所、判明はしていません。しかし、ウイルスは昔から存在し、形を変えてまた、私たちの生活に密着してくるのはまちがいありません。人の流れが国際的に激しさを増す一方ではこれからの日常は、このウイルスによって大きく変化してくるのは間違いなさそうです。

感染を防ぐには、人にうつさない、人に飛沫を飛ばさない、人混みを避け、うがい、手洗いを徹底させ、室内の空気を清浄に、身体と衣類を清潔に、適度の運動と、節度のある食事を心がける。簡単なようで何か一つくらいは忘れたりしているものだと思いませんか？万一かかったら、じっとしているという養生訓もありました。

ああ、くれぐれもご用心。

令和2年10月1日発行
［発行人］西餘好子

応援してくださる方々ありがとうございます

協会の活動にご協力くださいました皆様、ご寄付を有効に使わせて頂きます。これからも日本ららばい協会への応援をよろしくお願い申し上げます。温かなご支援を本当にありがとうございます。

2019年年12月15から2020年9月10日現在　五十音順

（敬称略）

［個人］

相川　厚
青山　成夫
青山　司
赤坂　みどり
浅井　典子
浅香　俊二
阿部　輝彦
綾乃緒ひびき
池本　幸一
井坂　義雄
石原　美佐子
市塚　廣
井出　存祐
伊藤　守
今井　要一
内野　綾子
内野　経一郎
江藤　昭子
海老沢勝二
江村　清
大石　照美
大貫　育子
大村　文雄
岡本　喜久穂
尾崎　眞吾
長田　暁二

帯津　良一
葛西　大八
柁原　年
春日　宏美
片山　雅文
神長倉万美子
金田　康男
川下　則子
川島　俊六
菊池　博之
木瀬　公二
北本　かほる
木村　賢史
木村　泰雄
國弘　敏子
国見　修二
剱持　英子
小泉　晶一
小内　法子
小山　啓子
斉藤　桂子
佐浦　弘一
酒井　菫美
佐藤　久子
佐藤　充雄
沢田　茂子
白石　晶子
白石　幸代

菅佐原　道夫
菅原　芳徳
砂山　一子
関　幸博
袖山　榮眞
田井　二郎
髙島　和子
髙橋　寛
髙松　榮子
武井　博
田中　安子
田邊　邦典
谷藤　正人
谷村　啓子
千葉　伝
辻　容子
土木　正美
泊　和男
富田　富士也
奈加　靖子
中川　榮治
中澤　浪子
中島　富志子
永田　亨
長縄　千鶴子
中根　宏昭
永見　徳代
中村　雅子

西尾　まき
根岸　登志子
野本　知子
則武　清司・美佐子
長谷川　了
濱口　千枝子
原田　直之
彌　信道
平田　英俊
福井　昌平
福永　教正
藤木　隆宣
藤澤　昇
藤島　寛昌
藤田　時江
藤田　嘉子
藤村　志保
古川　貞二郎
本條　秀太郎
前田　千恵子
真貝　まり子
松代　洋子
松本　博路
三浦　義孝
宮川　慶子
宮川　久子
宮崎　清
宮地　勝美
武藤　元昭
村井　繁雄
村田　正巳
森　勇
安江　和也
安岡　富士子
山折　哲雄
山川　忠
山口　栄
山下　耕司
山谷　えり子

山根　光恵
山本　定満
山本　ヤエ子
結城　天鼓
湯川れい子
柚洞　康子
百合　道子
吉田　博
吉田　由美子
李　順子
渡辺　久子

［団体］

一善水産株式会社
医療法人田口会新橋病院
株式会社サンハート
全国わらべうたの会
坊田かずまの会

ご寄付の応援をお願いします！

日本ららばい協会の活動は、皆様からのご寄付に支えられております。すべての子ども達が希望に満ちた未来をつかめるよう、皆様のお気持ちの託された寄付金を、様々な活動にいかしてまいります。

ご寄付をいただきました皆様に小冊子「ららばい通信」、イベントのご案内、また活動報告をお送りさせていただきます。どうぞ時期や金額に関わらず、年間を通してご寄付をお願い申し上げます。ご寄付への詳細は、日本ららばい協会事務局までお問い合わせください。

皆様からのお便り・ご投稿をお待ちしております。

◎子守唄について疑問に思うこと・知りたいこと、子育てについて思うこと、親子の思い出話などお送りください。思い出の写真なども募集しております。

◎あなたの町の地域活性化のための活動や育児支援活動、町ならではの活動など紹介したい情報がございましたら、ぜひぜひお教えください。「ららばい通信」を通じて地域の情報交換をしませんか？

◎皆様と共にららばい通信をより良いものにしていきたいと考えております。お気軽にご意見・ご感想をお寄せください。

日本ららばい協会事務局
〒125-0054
東京都葛飾区高砂3-13-13 三浦ビル1階
TEL　03-6458-0283
FAX　03-6458-0284
Eメール info@lullaby-japan.com
URL　https://lullaby-japan.com

［発行所］NPO法人 日本ららばい協会　〒125-0054 東京都葛飾区高砂3-13-13 三浦ビル1階
TEL 03-6458-0283　FAX 03-6458-0284　E-mail info@lullaby-japan.com　URL https://lullaby-japan.com

ららばい通信ご入用の方は当協会にご連絡下さい。
また、保存希望の施設や団体の方も合わせてお申込みくださいませ。